とは解らなかった，純漁村に関しては交通の発達及び海流の変化によって明治以後漁業経営の面で優劣の立場，従って集落の貧富が逆転してしまった例が見られる．これは湾奥の塩坂越集落と岬突端の常神をはじめとする集落とでは最初は内陸に近く交通の便利な湾奥に位置する塩坂越集落が市場に恵まれ経済的に豊かであったが動力船の導入によって交通の便が良くなったことその他経済的社会的機構の発達によりこれらの集落も同様に各地に自由に市場を獲得できうるようになり，さらに海流の変化によって湾奥にあまり魚がよりつかなくなったこと，又北方の岬突端における大謀網の設置によりさらにこれが増進されたこと等が主たる原因となっているのである．最後にこれからの発展方向としてはやはり変化の多い景観を利用した観光事業と地域の特性を生かした農業改善（温暖な気候と山腹の利用による果樹栽培等）に力が注がれよう．

千里山丘陵地域の地理学的考察

レジメ

北村　和子

調査地域は，大阪市の北方約15kmに位置する千里山丘陵とその西側に舌状についている豊中台地を含む千里山丘陵地域である．東を神崎川，西を猪名川の沖積地に埋められ，北は断層によって古生層の山地と分かたれているこの地域は，南北8km，東西10kmの塊状の丘陵地域であり，丘陵は30－80mの起伏の多い地形を呈している．この地域を特色ずける地質は鮮新～洪積旧期の大阪層群という，粘土，砂，礫の互層で，海成～浅海性の堆積物である．

この地域の人間居住の歴史は古いが，かならずしもそれは開発の程度を示すものではない．むしろこの地域は，大阪市の近郊にありながら最近まで開発の遅れていた地域である．その主な原因としては①水の不足，②地形の複雑さ，③交通の不便さの3つが上げられる．

調査のはじめとして，この地域の地形分類を，空中写真，地形図，現地調査により行った．丘陵斜面と谷底平野，段丘地形がこの地域の地形の特徴である．なかでも丘陵斜面，谷底平野は南北方向の谷の優越する東部にはっきりと見られる．段丘は西側の豊中台地を主とす千里川の4段の段丘と北側に旧勝尾寺川の作った思われる段丘（1段）が知られる．豊中段丘の4つの段

丘は各々5～10m程度の比高で各段が区別される。各段とも、古生層の礫が段丘礫層をなしている。これらの礫は、北の箕面山地より運ばれて来たものである。特に豊中台地を形成する礫層は、大阪平野の沖積面下の洪二礫層に対比され、非常に広範に堆積された礫層である。以上の地形分類より、次に地形区の設定をした。これは、地形区と土地利用、さらに丘陵開発との間に、何か本質的な関係が、あるように思われたからである。

農業土地利用・農業経営については、資料が不十分なため、十分な考察は出来なかったが、特色をあげてみると、(i)谷底にそって階段状に水田化されていること (ii) いづれもため池灌漑であること、(iii)裏作は少ないこと (iv) たけのこ栽培が重要な地位を占めていることなどであるが、稲作の反当収量は2石前後で低く他の換金作物にも〃たけのこ〃以外めぐまれていないため、かなり以前より兼業率の高い所である。しかし、これらの粗放的な農業は最近の都市化に抗しえず、多くは農業をやらない農家となり、農業をやろうとする人達は蔬菜、果物を中心とする高度に集約化された園芸農業への移行がうかがわれる。

千里山丘陵地域の都市化は常に大阪市の人口増加の吸収策として行われているのが特色である。都市化すなわち住宅化であるのも又この地域の特色とするところであるが、住宅地化の最初は、阪急電車宝塚線の敷設により豊中台地上に住宅経営地として開発された。明治末～昭和10年頃は高級住宅地域としての開発が主であったが、戦後、再び大阪市内の過出人口吸収策として豊中市の住宅地化は激しく、昭和30年には台地上はほぼ飽和状態になり、現在は台地から谷に降り、北の千里川沿いの段丘にのびている。豊中台地の飽和とともに千里山駅を中心とする千里山丘陵への住宅地化がおこなわれるようになり、特に大阪府企業局の計画する千里ニュータウンにより大々的な丘陵地中央部の開発がおこなわれつつある。この計画が、丘陵上の農業に与えた影響は、直接的（土地の買上げ）であり、さらに今後も様々の点で大きな影響を与えると思われる。

最後にまとめとして、この地域を (i) 既に開発されている地域、(ii)現在開発されつつある地域、(iii) (i) と (ii) をつなぐ地域として、近いうちに開発されると思われる地域、(iv)しばらく開発の遅れると思われる地域という四つの指標に基ずいて地域区分を行った。